

事例紹介③ 絵馬 — 林花音

ここで紹介するのは、影向寺の絵馬である。影向寺は川崎市宮前区野川本町にある天台宗の寺院であり、本尊は薬師如来を祀っている。その縁起は天平年間に遡るとされ、大変歴史が深い。そこに奉納されていた絵馬が当館に収蔵されている。絵馬のモチーフは、眼病快癒を願った「向かい目」や、母乳の出がよくなるように祈願した「乳出し」などがあり、奉納された時代の生活環境、生活実態などを考察するうえで貴重な資料である。しかし、応急処置の事例でも述べたように、絵馬などの顔料を使用している収蔵品は、不用意に洗浄を行うと顔料が流れ落ちてしまう可能性が非常に高く、乾燥させて燻蒸するのみとなっていた(図1)。しかし、このままでは収蔵品を安全に取り扱うことが難しく、着色部分の劣化も懸念されることから、修復技術者に本格修復を依頼した。以降、修復技術者からいただいた報告書をもとに事例を紹介する。

今回の絵馬の修復は、状態調査・記録写真の撮影、クリーニング、剥落止めなどの処置、という流れで作業が行われた。修復後にも、記録写真を撮影する。作業に入る前に、状態調査を行い、記録写真を撮影した。状態調査により、板の反りが著しく、木目には細かい砂が詰まっていることが明らかとなり、水分を用いて洗浄することが検討された。しかし、

木材は水を与えると膨張し、乾燥しながら収縮する性質があり、修復を依頼した絵馬はこの動きが大きく、水分を極力使用しない方法で処置をすることとなった。また、顔料の粉化や、剥離、剥落も見られたため、剥落止めも行う必要がある。絵馬は顔料だけではなく、金属を使用しているものもあり、そうしたものには金属部品の鏽が進行していることが確認された。そして、形も一枚板のもの、二枚の板が釘でつながっているもの、縁のあるものなど様々であり、それぞれに応じた処置を行っていくこととなる。

絵馬は燻蒸をしたのみであり、泥やカビ、付着物が残存している状態であった。健康に害が及ぼす、安全に取り扱うことができるようクリーニングをする必要がある。クリーニングでは、表面のカビを払いながら文化財用のクリーナーで吸い取り、固着した薄葉紙などの付着物を除去した(図2)(註1)。しかし、乾式のクリーニングのみでは完全にカビや砂などの細かい粒子を除去しきれない。少しでもカビを抑制し、表面の汚れを軽減させるためにエタノールを溶媒としたヒドロキシプロビルセルロース(註2)(HPC)を用いてのクリーニングを検討した。試行後、問題ないことを確認し、使用することになった。HPCはやや粘度があり、一時的に表面に留まることからカビの抑制に効果がある。また、筆に汚れが付着したことから表面層の汚れの軽減にもつながり、粘度があるため、一時的に顔料の粉化防止にも効果があった。

クリーニング後に、顔料が使用されている絵馬は、膠による剥落止めを行う(図3)。顔料は部分的に薄い層状で固化している箇所もあったが、膠分がほとんど残っておらず、大半は表面が粉状化していた。層状の部分と粉化している箇所は浸透性が異なるため、状態に合



図3 | 剥離止め



図2 | クリーニング



図1 | 被災後